



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



講演会「マスコミに報じられない世界の真実」に参加して

森田 哲行

初めまして。協会会員の森田です。8月30日に講演会『マスコミに報じられない世界の真実』を受講させていただきました。この講演会の講師はキャノングローバル戦略研究所顧問で大分県立芸術文化短期大学理事長・学長の小手川大助先生です。先生は金融や国際情勢に通じる方で、日本の一般的なメディアでは取り上げられない視点で、現在進行形のさまざまな世界の問題について、地域ごとに講義していただきました。

講演では、一般的な海外メディア、米英のメディアだけに頼らず、さまざまなソースや歴史的な事実、加えて政策決定に関わる重要人物の背景などをベースに話されました。分かりやすくまとめられ、筋が通った話でとてもためになりました。その内容を簡単に紹介させていただきます。

イスラエルとガザ問題。「第一世界大戦時の英仏の思惑から始まり、イスラエルの建国、さらにアメリカとの関係にも紛争の原因がある。また、紛争に至るまでの、ネタニヤフの経歴や行動にも目を向ける必要がある。」

ヴェネズエラとイラン問題。「両国とも資源国であり、アメリカにとって重要な国である。一方で、国のあり方や歴史などの点で両国は異なっている。そのためヴェネズエラではうまくやれたが、イラン問題ではうまくやれてない。また、イランと中国の石油貿易の現状や、日本のホルムズ海峡通過LNG貿易割合など、正しく状況を見るべきである。」

アメリカの問題。「候補者の支持層に加えて、どこから支援を得て大統領選を戦っているかも考えるべきである。トランプは金融ファンに頼らなかった大統領である。『大統領

のわがまま』という論調で考えるべきではない。また、米英にはロシアを悪者にしたい政治家もいて、メディアもそれに追随するもの(偏向報道)も多い。」

ウクライナ問題。「ソ連崩壊・ウクライナ独立以降の国力・経済の状況を踏まえるべきである。また、これまでの各大統領などの問題も考えるべきである。さらに、ロシアとの紛争が始まるまでの米英が干渉してきたこと、紛争を防ぐチャンスが何度もつぶされてきたストーリーも考えるべきである。また、ロシアに対する経済制裁は、日本のメディアのイメージと異なり、英米、EUなどが主で、制裁不参加国が多く、また、制裁参加国の中に抜け道が存在していることも知るべきである。そうでないと日本は損をする。」

中国問題。「長老の後ろ盾がない指導者である習近平にとって、国民をどう納得させるかという理論が重要である。また、中国メディアは中国国民に対する説明でしかない。それも踏まえて、中国の動きを見るべきである。」

最後に、今後の世界の動向と日本のマスコミの系列と衆議院について。「日本のメディアは米英の報道に頼るものが多く、独自に取材したものが少ない。親中国に偏ったマスコミもある。加えて、米英のメディアも自国に都合の良い、偏った報道もあることを知るべきである。」

私としては、日本の報道の中に矛盾を感じているものもあったので、新しい視点を与えてくれて、ためになりました。また、講演後も小手川先生と話をする人や、出席者同士で意見を交わす人もいて盛り上がった講演会となりました。先生に感謝申し上げます。

お知らせ

●ロシア語教室生徒募集中!

レベルに合わせたクラスを、それぞれ経験豊富なロシア人教師陣が担当いたします。プライベート、オンラインレッスンもあり、見学も1回のみ可能です。*こちらの定期のロシア語教室をご希望の方は、ご入会いただくことになりますのでご了承ください。

●懇親講演会

テーマ: 日本とロシア～ピアノ交流の歴史～

講師: 萩谷由喜子(はぎやゆきこ)音楽評論家、ジャーナリスト

日時: 2026年11月28日(土) 14:00～16:00

場所: 田町「リーブラ」学習室B

会費: 1,500円

●ロシア語の泉(18)

日時: 10月25日、11月15日、12月(日) 13:30～16:00

授業料: 会員7,000円、一般8,500円

講師: タチヤナ・スニコ

*9月はお休みになりました。

●ロシア民謡を楽しむ会員募集中!

アルト、バスの方が不足しております。ロシア人ピアニストの先生の指導のもと、楽しく歌いませんか。10月には「ふれあい祭り」での発表会もあります。

*お申込み、お問合せ等はメール、FAXでお願いいたします。

NP0日口交流協会事務局 Fax: 03-5563-0752

E-Mail: nichiro@nichiro.org

●第28回国際ボランティア祭り「夢広場」

日時: 2026年11月3日(祝) 10:00～15:00

場所: ぽっぽ町田 野外広場

*様々な国の民芸品の即売、舞台では民族舞踊。マースレニツァでお馴染みのスラヴァーニュも出演します。

●展示即売会「布遊会」

日時: 2026年11月9日(月)～10日(火) 11:00～18:00

場所: 池袋西口「オレンジギャラリー」

*手作り品、マトリョーシカなども少しあります。



ロシア語合宿に参加して

中村 悠人

こんにちは、協会会員の中村です。静岡県伊東市で8月22、23日に開催された懇親ロシア語合宿に参加いたしました。今回の合宿には8名(内講師2名)が参加し、ロシア語のレッスンはもちろん、料理体験や参加者同士の交流ができました。

【1日目】

集合時間より早く駅に到着したため散策していると、ポロビエフ先生が休憩所にいらっしゃいました。今回、私は先生に初めてお会いし、少しの時間ですがお互い打ち解けてお話しできました。集合時間になると皆さんが集まってきて、真夏の暑さの中、参加者で会場まで歩いて向かいました。

会場に到着すると、先に到着して準備していた中村さんと千葉さん、スニコ先生が、料理体験など会場の準備をしてくださっていました。全員そろったところで、先生が準備したロシア伝統のリンゴとミントのビタミンドリンクを飲みつつ、全員で自己紹介を行いました。自己紹介はロシア語で行い、ロシア人講師の2名の方はもちろん、ロシアに関する研究、仕事をしている方、ロシア語を勉強している方など、様々な背景を持つ方がいらっしゃいました。

自己紹介の後、中級・初級と2つにクラスを分けてロシア語のレッスンを行いました。私は、初級でポロビエフ先生の「写真で見るソ連(курс《СССР в фотографиях》)」という講座を受けました。ソ連時代の庶民の暮らしを写真と文章で見えいき、議論や質問を通して学びました。先生の解説も交えながら、意外と知られていないソ連の生活について、より深く知ることができました。中級は城ヶ崎海岸周辺のガイドになったという設定で、現地のロシア語の紹介文をテキストに勉強しました。

レッスン後、ロシア料理の体験をしました。料理は、南方風サラダ、古き良きロシアの具沢山スープ、ミートボール



(ハリネズミ)のトマトソース煮込み、ロシア風パンケーキを、スニコ先生を中心に参加者で協力して作りました。私は何度か料理講習会に参加してきましたが、特にロシアのスープは香辛料の香りや豊富な具材の旨味が重なり、深い味わいがして気に入っています。

食後は、特別ゲストの渡辺先生(外語大名誉教授)がメチニコフについて明治期の日本人との関わりなどを含め、とても興味深い講義をしてくださいました。そして、参加者同士で歓談を楽しみながら夜を過ごし、温泉に浸かり、一日を終えました。

【2日目】

朝6時半ごろに起床後、城ヶ崎海岸まで1時間30分ほどの散歩をしました。中級クラスの勉強の成果を発揮してロシア語で観光スポットを紹介したり、城ヶ崎ブルースの歌碑の前ではロシア語に訳した歌を歌ったりしました。かなりの断崖絶壁で、それに沿った道を歩きましたが高低差があり、良い景色を堪能しながら朝から良い運動になりました。

散歩後、前日にまとめて作った料理をメインに朝食をとってからレッスンに入りました。分からない単語につまずくたびに先生や周りの参加者に助けてもらいながらも、自分の言葉で質問し相手の答えを理解できた瞬間は、これまで積み重ねてきたものが少しずつ使えるようになってきていることを実感させてくれました。

2日間を通して、ロシア語のレッスンだけでなく、料理体験や自然豊かな環境での散歩など、盛りだくさんの内容の合宿となりました。生活を共にすることで、いつも以上に参加者の方々と深く交流できたことは大変嬉しく思います。最後になりましたが、講師の先生方、そして準備・運営にご尽力いただいた皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

ロシアからのお客様に文化体験を

千葉 麻里

いつもマースレニツァなどで協力してくれるナタリヤから依頼が入ったのは、5月の終りころ。7月初めにロシアから日本観光に来る24名の人たちに伝統文化を体験させたいという。ナタリヤ主宰の「グロバス」で、池袋の施設を借りられるというので、書道、風呂敷、ゆかたの体験をしてもらうこととなった。

午前中は、いつも大使館でも講習会をお願いしている現代書道研究所理事の武井幸一先生に、書道の講習会をしてもらった(写真)。通訳はナタリヤさんがし、筆を持つのも初めての人たちに基礎から教えてくれた。年齢も様々、日本語も分からないメンバーで人数もいつもより多かったので、道具を揃えるのも大変だった。が、成果は出たようだ。

午後は風呂敷講習会で、ナタリヤさんが90センチ四方の布を調達していたので、包む物(ペットボトルや本)を何人かで回



し、風船を各自に渡して使ってもらった。この風船がくせもので、真結びが難しくて子どもたちが遊び始めて落ち着かなくなった。それでも、なんとか数種類の包み方をマスターして満足したようだった。

その後は、ゆかたを着て写真を撮るというスケジュール。前もって送っておいたゆかた10枚に、持ち寄った4枚を広げて好きな柄を選んでもらう。着物講師の森先生と辻田先生にお手伝いをお願いしてあったので、短時間で着付けは終わったが、写真を撮るために出かけるとなかなか戻ってこない。浅草などでも、ゆかたの着付けを観光客にしているのだが、商売なのでこれが結構高い。

伝統文化を学びたいという目的の団体とは少し違っていたが、片鱗に触れてもらうことはできたと思う。



「イワン・クパーラ」in赤塚公園

安部 花子

7月25日、板橋区にある赤塚公園でのイワンクパーラに参加した安部と申します。今年のロケーションは、都営地下鉄・高島平駅徒歩8分、スーパー・コンビニ隣接の超都心型の便利な立地！にもかかわらず、広大な公園内のバーベキュー敷地には背の高い木々がたくさん植わっていて、青々とした枝葉が緑の天井のように太陽光を遮り、木漏れ日だけが降り注ぎます。その様は、さながら都会のオアシスと言ったところ。



今回は30名弱の参加者が集まり、例年は学生さんや若い方が目立ちましたが、今年は大人の参加者が多めでした。日向寺専務理事のご協力により、バーベキューコンロをはじめとした広大なブルーシートや居心地の良いテーブルセットなども設営され、木陰でキンキンに冷えたビールを飲んで涼んだり、ブルーシートに寝そべって日光浴をしたりと、リラックスした大人のバーベキュー時間を過ごすことができました。

若者多めの賑やかな会も楽しいものの、大人が多めの会はロシアとより多様な関わり方をしている人たちとじっくり会話する機会が多く、こちらも大変興味深いです。結婚相談所を経営し、ロシアの相談所と連携して国境を超えた縁結びにチャレンジされている方、外国の料理に興味があり、世界各国の料理教室を楽しむ教員の方…なかでも心に残ったのは、おそらく子供達を除けば最年少、一人で参加していた高校生の女の子。漫画がきっかけで今まで全く関心がなかったロシアへ興味を持ちはじめ、ロシア語が学べる大学を目指して猛勉強中とのこと。まわりにロシア好きの友達が一人もおらず、なんとかロシアに繋がるものにアクセスし

ようと岩橋さんの経営するロシア雑貨店「ロシアアンディー」をネットで見つけて訪れ、今日のイワンクパーラを紹介されたそうです。

思えば私も10年前、2016年7月のイワンクパーラが日口交流協会のイベントへの初参加でした。まわりにロシア好きが一人もいない中、当時なんとかロシアにつながるものに触れたいと、行きつけのロシア料理店で開催されたマトリョーシカ絵付け教室に参加した際、偶然同席した千葉会長にお声がけいただいたことがきっかけでした。ロシア人直伝の岩橋さんお手製シャシリクで「本物のロシア」を味わいながら、たくさんロシアの話を聞かせてもらい、ロシアの歌で踊りながらみんなで焚火を飛び越え…ロシア文化に憧れていた自分には、忘れられない思い出となりました。まさかそこから10年も協会行事に参加して交流紙の記事も書かせてもらっているなんて、当時の自分に教えてあげたいです(笑)。

10年前に初執筆したイワンクパーラの記事を見返してみると、ロシアにとっても興味があるのに、日本国内に居ながらその興味の対象へどうアクセスして良いかわからずにいたこと、たまたま自分は縁があって参加できたものの、自分と同じような迷えるロシアファンはまだたくさんいると思うので、今後もイベント企画などを通じてロシアに触れる機会を与えていってほしいことが書かれていました。そのころからも、それより前から、そんなイベントがずっと変わらず続いているということに泣きそうになりつつ、今後も微力ながら、自分も継続の一助になればいいなとしみじみ思うイワンクパーラとなりました。

国際放送史研究の戯言No39

宿舎はヴァヴィロヴァ通り79番地

島田 顕

私が勤務していた時のロシアの声放送職員の宿舎(寮)は、モスクワ市内を南北に貫く地下鉄線カルーシュカ・リーシュスカヤ線の南のはずれ、プロフソユーズナヤ(労働組合)駅から歩いて30分ほどのところにあった。ヴァヴィロヴァ通り79番地。建物自体は14階建てで私の部屋は7階だった。ヴァヴィロヴァ通りの名前のもとになっているのは、有名な物理学者のヴァヴィロフ(1891-1951)である。モスクワ大学の教授をつとめ、『ソヴィエト大百科事典』(第二版)の編集長だった。

南のはずれのベッドタウンでアパートが林立している。といっても、何もなかったところではなく、非常に便利で、西に行けばレーニンスキー・プラスペクト(レーニン大通り)、さらに西には地下鉄線カルーシュカ・リーシュスカヤ線に並行して南北に延びるソコーリニチェスカヤ線のユニヴェルシチェート(大学)駅にたどり着くことができる。楽々と都心に出ることができるのだ。

宿舎の近くにはチェリョームイシュキンスキー・ルイーノク(市場)がある。ここでは新鮮な野菜、肉をはじめ、日用雑貨まで、あらゆるものを手に入れることができる。水洗トイレのフロートが壊れた時もここで入手できた。もちろん修理は自分自身で行ったが、市場には高級食材のチョウザメも水槽に入れられていて売られていた。もちろんキャビアも大きな瓶詰のものが安く売られていた。市場で見たものでショックだったのはウサギの肉で、皮をはいだだけの丸々ウサギの形をしたものが売られていたことだった。肉といえば、ロシアで肉を買うときは量り売りで、一キロ以上の塊を買わなければならなかった。日本のように100

グラム単位の買い方はできない。そして家に帰って、その塊の肉を細かく切るのである。備え付けの包丁は切れ味が悪かったので、カッターナイフで切ったことを思い出した。私が退職した後には市場の近くには、さらにボーリング場とか、カジノもできたそう。

チェリョームイシュキンスキー・ルイーノクからプロフソユーズナヤ駅、ユニヴェルシチェート駅までは徒歩でも行けるが、トロリーバスに乗って10分位で行くことができる。チェリョームイシュキンスキー・ルイーノクは交通の便も良く、放送局のあるピヤトニツカヤ・ウーリツツァ25番地までは路面電車39系統を使って一本でいくこともできる。ただし、路面電車はどこも同じで自動車道の並走線では交通渋滞の影響を受けやすいので、出勤時は地下鉄を利用し、路面電車は帰宅するときに、急いで帰る必要がないとき、ゆっくりと帰りたいときは路面電車に乗るのである。

家の周りはアパートしかないのだが、ぼつぼつとキオースク(小売店)があった。パンの売店、野菜の売店、牛乳・チーズなどの乳製品の売店、ビールなどの酒類の売店、ハム・ソーセージの売店、清涼飲料水などの売店、卵の売店など、口に入れるものには事欠かなかった。スーパーマーケットもレーニン大通りにはあるのだが、そこまでいかなくても、また市場に出なくても、ちょっとした買い物を済ませることができた。

普段の生活は結構快適だった。こちんまりとしていて良い町だった。ちょっと懐かしい。

クール！レニングラード 連載No.4 「ペトログラード島の文化宮殿」

おさむ
宮川 琢

ソ連末期のレニングラードで見たクールなもののシリーズ第4弾です。

レニングラード国立大学で勉強する以外に、個人の家庭教師からロシア語を教わっていた。ラリーサ・マケドンスカヤと言う女性で、日本語をそれなりに勉強していた方だったこともあり、その時代にレニングラードで勉強していた多くの日本人が彼女についてロシア語を勉強していた。家庭教師と言っても、実際はソ連末期の商店にまともな商品がない時代、彼女のアパートに行き、彼女の作ったロシア料理を食べて、不足していた栄養を摂取しに通っていたと言う方が正解だろう。勉強時間1.5時間、夕食時間1時間と言う時間配分を見ればおわりの通りである。彼女のアパートは地下鉄ペトログラーツカヤ駅から歩いて10分弱のところにあったのだが、途中でいつも気になっていた大きな建物があった。建物の名前は文化宮殿Дворец культурыと言い、宮殿と言う名称はずいぶん仰々しいものだ。

ある時、当時のソ連を代表するフォーク歌手ジャンナ・ビチェフスカヤのコンサートポスターが街に出た。開催場所がなんとあの文化宮殿ではないか。ソ連のフォーク歌手の中では、ヴィソツキーやオクジャヴァくらいしか知らなかった私は、ほぼ文化宮殿見学をお目当てにチケットを買い、喜び勇んで出かけた。中に入ると何とも豪華なコンサートホールだ。エントランスホールは大シャンデリアが吊るされていて、それだけでも豪華なのだが、コンサートホールは本格的なミニオペラハウスで、オーケ

ストラボックスもあるし、3階建構造でバルコニーもある。さらにカフェは期待以上で冬の庭(温室庭園、サンルーム)を楽しめるのだ。道路に面した商店は協同組合形式のもので、西側から持ち込んだ製品を並べたショップも多数ある。やはり日本の各市町村にあるような文化会館ではなく、ソ連文化が豪華絢爛にごちゃまぜになって、てんこ盛りの威風堂々たる建物であり、まさに「宮殿」の名に相応しいのだ。このような文化宮殿はサンクトペテルブルクに合計7ヶ所もあるがあるのだが、この文化宮殿が最もごちゃまぜ感がある。

この建物は世界中で流行していたローラースケート場として1910年に建設されたようだが、その後1931年以降に順次、文化宮殿に改築されて以来、レンソヴィエト(ソ連時代のレニングラード市議会)名称の文化宮殿と言う名前で現在ではペテルブルクっ子の文化を下支える立派な劇場の一つとして機能している。



歌手ジャンナ・ビチェフスカヤ

(URL: <https://spb.ticketland.ru>)より

レンソヴィエト文化宮殿外観

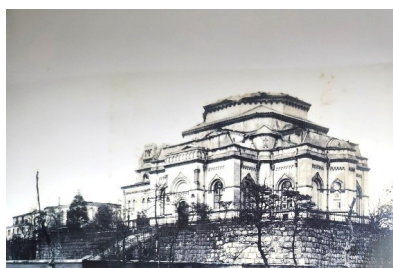
(Wikipediaより)

ロシア人が体験した関東大震災(1923年9月1日):セルゲイ府主教の大震災記録より

倉田 有佳

各地で自然災害のニュースを耳にする昨今だが、103年前の関東大震災に遭遇したセルゲイ府主教(1912年にニコライの後継者として着任)が実体験を綴った「大震災記録」(1930年発行。露文和訳は、府主教ダニイル監修『東京復活大聖堂と関東大震災』正教時報社、2002年、3-38頁)は記録として貴重なだけでなく、示唆に富んでいる。

地震発生時、セルゲイ府主教は大聖堂(通称ニコライ堂)敷地内の食堂で昼食を待っていた。「強い地震のときは、扉枠の下にいなさい。壁が崩れても扉の枠の下にいれば、かすり傷程度ですむよ」、という故ニコライ大主教の言葉に従って行動するが、これまで経験がないほどの激しい揺れが続く。死をも覚悟するが、揺れが弱まり、なんとか外へ脱出。すると料理人ティト高木が駆け寄り、セルゲイの手を取って大きな銀杏の木の下に。これは、地面に入った亀裂が再び閉じても木の根につかまっていれば割れ目に落ちない、という1世紀前の日本人の知恵である。二回目の揺れは、「地面が海の波のようにうねった」。およそ37mの高さの鐘楼が半分に折れ、その尖塔が



出典:『東京復活大聖堂修復成聖記念誌 1998・5・17』

聖堂の丸屋根の上に倒れた。あたり一面は火の海となるが、セルゲイらが避難を決めたのは午後4時30分。日本人の巡査から避難を促されてのことだった。向かった先は、日本人避難民でごったがえす上野公園方向とは逆の角にあるロシア大使館だった。

午後6時にやっとのことで到着。大使館も半壊状態で、皆が庭に避難していた。セルゲイたちも屋外で寝た。

翌2日の早朝、ニコライ堂にセルゲイは向かい、焼き尽された聖堂【写真】、灰燼に帰した図書館所蔵の貴重な古文書や書籍の数々、出版間際の自身の原稿等を目にし、「しばらく立って泣いていた」。

大使館に戻り、大聖堂が焼失したことを話すと、大使館員以外の者から、「それでいい、ロシアがないのだから[1922年12月ソ連邦成立]大聖堂もないのさ」、と言い返される。セルゲイは「寒気がして猛烈に反論」した。

9月4日、大使館から知人宅へ移る道中、偶然出会った日本人から暖かい言葉と共に赤ワインの瓶が差し出された。日本には何百万人もの洗礼を受けていない人たちがいるが、「すばらしいクリスチャンの心を持った人で満ちている」、とセルゲイは感動。余震は続く。

9月5日、町で深い鉢・皿、スプーン・ナイフ・フォーク、湯呑茶碗と急須を買い、小学校(救済所)で避難民名簿に登録。大使館に居た時は「治外法権のせいで腹ぺこ」だったが、ここでは食料の公的支援(じゃがいも・ねぎ・米・肉と魚の缶詰)を受け、大阪から送られてきた100グラムのパンは、「薄く薄く切って、数回に分けて仲間と大喜びで食べた」。

生活再建の兆しが見え始めたところでセルゲイ府主教は「大地震と火事についての悲しい物語」を終え、聖堂復興へと歩み出す。(ロシア極東連邦総合大学函館校教授)